

氏名	余 夢婷
学位の種類	博士(造形)
学位記番号	博第36号
学位授与日	2022年3月18日
学位授与の要件	学位規則第3条第1項第3号該当
論文題目	絵画の物質的想像力と夢想 ——作品制作とその考察を中心に——
審査委員	主査 武蔵野美術大学 教授 川口 起美雄 副査 武蔵野美術大学 教授 樺山 祐和 副査 武蔵野美術大学 教授 是枝 開 副査 武蔵野美術大学 教授 遠藤 竜太 副査 武蔵野美術大学 教授 北澤 洋子

内容の要旨

19世紀末から、多くの芸術家が夢を作品の主題とし、選択することを好んだ。夢は多くの作品に登場し、夢そのものをテーマにした芸術家もいる。夢を自らの内面表現として捉え、作品へと結ぶ。私たちが夢を見るのは、夢を必要としているからとも言える。夢は私たちが気づかないことを教えてくれ、より理解させてもくれる。人間は夢を見る生物と言われ、私もその生き物の一つに過ぎない。私は毎日浅い眠りのなか幻想的な夢を見続け、目覚めても内容を覚えている。これは夢か、現実の再構成か、自らの日常を対象に客観的な視点から観察を行うことからこの問題を考え始めた。制作過程において、想像することもまた夢を見るように自分自身を内観して意識の再構成をする行為だとするならば、どのような結果が得られるのか。

そこから、私は夢についての思考を始めた。フランスの哲学者ガストン・バシュラール(Gaston Bachelard, 1884-1962)は物質が伴う想像的な成分、すなわち物質的想像力を哲学的に説明している。彼は古代ギリシャ哲学に由来する四大元素、つまり、水・火・空気・土を根本的な物質と見なして、これらの物質が喚起する想像力について論じた『水と夢——物質的想像論』の序文は、次のように書かれている。

『火の精神分析』において、伝統的哲学と古代宇宙論に着想をあたえた物質の諸元素の記号を用いて、想像力の種々の類型を分類するようにわれわれは提案した。実際、われわれは想像力の支配する領域において、物質的想像力が、火か、大気か、水か、土の、いず

れかに結びつくことによって、多様な物質的想像力を分類する四大元素の法則を定めることが可能だと思っているのである。¹

この本の冒頭で、バシュラールはまず哲学的に二つの想像を区別している。彼は「ひとつは形相因を活気づかせる想像力であり、他のひとつは質料因を活発化する想像力である。あるいはもっと簡潔にいつてしまえば、形体的想像力と物質的（質料的）想像力である。」²を述べた。彼が考察の対象としているのは、物質的想像力である。物質的な想像力は、芸術家の表現の根本的な力であり、私の作品のインスピレーションの源でもある。絵画は作者の夢に依り、画面に表れていないもの、例えばイメージやストーリーの奥にあるものを生むことができる。

バシュラールは物質的想像力は夢の状態であり、この状態こそが新たな発見と詩的生成の最良の状態であると考えた。夢は想像の主体と元素の相互喚起によって生成され、要素は言葉や詩によって把握される。しかし、人々の想像力には限界があり、その限界が彼らの想像力の発達を制限するかもしれないし、そもそも想像力が乏しいのかもしれない。想像力をどうやって示すことができるかという問いが、絵画という物質を使った想像力を用意する。

このような思考を得て、その先に私は夢と風景との関係について考え始めた。私が探求しようとしたのは北方ルネサンスのヨアヒム・パティニール (Joachim Patenier, 1480頃-1524) の作品である。パティニールは風景画で時間の流れを描き、そこには四大元素が表れている。パティニールの絵には、青い空（風）と海（水）が描かれていて、これらの物質は時間の循環と見ることができる。時間の循環に不可欠なものは火のエネルギーである。火は植物や動物を燃焼し、エネルギーとして摂取し、万物に作用する。太陽の熱で、水分が蒸発して雲ができる。空気は風を形成し、風が水の移動を引き起こす。水の流れは時間の流れと結びつけられ、雲は水の形態の一つである。水蒸気は水分が多いと雨や水となり、地表や水面に降り注ぐ。土と水が混ざると泥になり、泥を造形すると部屋になり、町になる。土地は水分を吸収し、その養分は植物を育て動物に食べられる。土が動物を養育し、動植物が衰弱して老いていくとまた土に戻る。パティニールの絵にはこの時間の流れが描かれたと考えられるだろう。

私は子どもの頃の夢をきっかけとして、夢に対する関心から自分の思考を生み出してきた。夢と絵画の創作との関連性を探求するために、バシュラールの夢の理論とヨアヒム・パティニールの作品を結び、模写を通して自分の夢に基づくイメージ、夢と「物質的想像力」が絵画に与える影響とその発揮できる価値を探りたい。同時に、作品において描画材との複合的アプローチを模索していく。私は作品との深い対話の中でより成熟した感情表現を創出させたいと願う。

本稿では、フランスの著名な哲学者ガストン・バシュラールの物質的想像力を出発点に、絵画表現における夢の可能性を研究する。そのために、ヨアヒム・パティニールによる《ス

テュクス川を渡るカロン》(プラド美術館 64 × 103cm)と《聖ヒエロニムスのいる風景》(プラド美術館 74 × 91cm) を模写し、足掛かりとする。また、物質的な想像力から出発し、作品のなかで想像力(イメージ)の定着について思考することによって、それが絵画についてどのような可能性を持っているのかをまとめる。絵画表現の可能性についてその動機要因を分析し、パターンを識ることで夢による作品に隠されたアーティストの感情要因について理解を深める。

本論文は全四章で構成されており、第一章は夢と美術創作の関連性について論じる。夢は精神の一つの表象である。この章では、絵画表現を使って夢を実現することの重要性について説明する。夢を描いた作家たちを例に、夢と夢の関連性、また著者の夢について展開したい。

第二章では、絵画は夢を実現するための想像力を欲することを紹介する。バシュラールの物質的想像力を出発点として、哲学における物質的想像力と絵画における物質的想像力の共通点を探る。絵画によって夢を表す方法を試み、より多くの視覚的な幅を探す。

第三章では、パティニールの技法から空間の構造や思考の方法を取り入れることで、作品がどのように構築されているのかを理解する。空間構成は創作の重要な要素であり、絵画作品を理解する上でのポイントでもある。それは作品の骨格のように、常に全体を貫き、欠くことができない。パティニールの作品を研究し、絵画の形式言語、画面構造における対比関係を探り、自作への応用を考えたい。

最後に、バシュラールの思考方法とパティニールの空間や構築する仕方を取り入れることによって、今までの表現を豊かにして、更に新たな自分なりの表現方法を確立することができた。即ち、自分の作品でそのような思考方法と空間の構築手法を活用し、更に夢を絵画という言葉で語ることである。その上、今回の研究を通じて創作の脈絡を整理し、未来の創作の道に、そして理論に方向性を与えることを願う。

註

1. ガストン・バシュラール、及川馥訳、『水と夢——物質的想像試論』、法政大学出版社、2016年、p.5
2. 同上、p.2

審査結果の要旨

論文の概要

本論文『絵画の物質的想像力と夢想』は、作品制作とその考察を中心に、絵画表現における対象としての夢の可能性を追うことから始まる。過去の絵画作品のなかで、夢の形象を拾いあげ的方法、それらを洗練させる方法がどのようにして展開していったかを考察し、夢想により生まれるイメージを絵画のための装置として機能させるべく、自らの制作においての実際を論じている。

論文の内容と構成

研究の目的、その背景として夢を作品へと結ぶ意味が述べられ、制作過程での想像を、夢をみることに重ね、自分自身の内なる現実を内観する意識の再構成なのだ方向を示している。またガストン・バシュラールの、触覚的身体の記憶が対象の物質性を通して生まれるイメージの概念である「物質的想像力」をテキストに、四大元素の重なりあう北方の画家ヨアヒム・パティニールの絵画空間に流れる時間の循環をみて、中国での子供の頃の記憶を辿り、分解し、それぞれのエレメントとの距離を計りながら制作へと向かった。

第一章では、夢が創作の始まりとして用意されたことの意味が述べられ、夢そのものが描かれた絵画が、十世紀の《ネブカドネザル王の夢》から、ウィリアム・ブレイク、サルバドール・ダリを経てフリーダ・カーロの《夢(ベッド)》までが紹介されている。バシュラールの「夢」と「夢想」の区別が明確にされ、夢想は意識的な夢であり、夢と現実の再構築であると述べられ、絵画における夢想の表われ方を、アンリ・ルソーの《夢》を例に挙げ、内的リアリティを呼び起こす方法として描かれた確かな作品として示している。

第二章では、絵画における物質的(質料的)想像力について、バシュラールの物質的想像力の輪郭を出発点に、哲学における物質的想像力と絵画のそれとの共通点を探ることから論を進める。身体的記憶の先に生まれるイメージ、意識的な夢としての夢想が、子供時代のいくつかの特徴的な出来事によって、身体の内側に住みついた「内なる子供」の根源的な意識から立ち表われるというバシュラールの思考へと繋がる。さらに対象の色彩、それを模倣した色彩から離れ、望む新たな色彩があることを提示する。そして連続する時間としての空間のエレメント―地水火風が述べられ、ルネ・マグリット、北宋の範寛、李成、関同と、洋の東西を問わず作品のなかで解釈が拓げられ物質的想像力との繋がりがさらに論じられる。物質的イメージと自己認識に基づいたイメージの関係に言及し、それらが自らの作品に与える影響を予感する。絵画における物質的想像力の展開は、見える世界、事物を再現、模倣することだけではなく、内的現実としての世界を、日常的な、身近なものを対象とすることから出発し表現することであると述べる。

第三章では、北方ルネサンス、初期フランドルの画家ヨアヒム・パティニールを取りあげ、「世界風景」として描かれた特異な風景表現を考察し、その構造が子供の頃の記憶と結び、幼い日の岩山からの眺めと重なっていると述べ、それはパティニールの内なる「子ども」が作用した結果であることが提示される。次にパティニール作品《ステュクス川を渡るカロン》と《聖ヒエロニムスのいる風景》の模写を通しての実際が示される。檜の代わりにシナベニアの基底材が用意され、膠水溶液に白亜が混ぜられてプレパレーションとなる。下絵が転写され、その上に一層めの絵の具層としてテンペラ絵具黄土によるインプリミトゥラが施される。濡らした溶き油上にテンペラ白色で形象を浮きあがらせていく。インプリミトゥラの延長線上の透明色が塗られ、全てを空間に戻す。形象がうっすらと表われている明るい部分から移行部分までに再度テンペラ白での補強がなされ立体的な形象となる。油彩での彩色とグレースが繰り返され重層的に色が整っていく。表面の光まで、油彩のなかに組み込まれていくテンペラ白が、形象の浮き出しから色出し、そして光へと大きく動きを変えていく。パティニールの絵画空間を追うことにより、油彩の重なりの中に構造がどのように作られていくのか、思考がどのように入り込んでいるのかを探り、理解したかが示される。

第四章では、自らの作品制作において、動機付けされた対象である「夢想」が、夢と日常の裏打ちによって、内的要因としていかに機能しているかを述べ、バシュラルの物質的想像力とパティニールの空間の影響を、2018年の修士前期課程時の作品まで遡り、俯瞰的に現在の作品へと繋がる確かな流れをみせている。

終わりに、自らの夢想を如何にして具体化していくのか、心の空間、思考の時間を複数の視点から画面上に定着させ、絵画の技術に意識としての方向を加え技法とし、内なる世界を描きだすことが、鑑賞者、享受者の世界と重なることだと述べ、心の奥底にいる「あの子」を探しだすことが、今後の表現の意味であると述べている。

論文の成果

絵画表現のなかで夢を対象とすることの可能性を問うことから始まった本論文は、意識的な夢としてバシュラルの夢想、物質的想像力として立ちあがるイメージを考察し、子供の頃の記憶や、地水火風のエレメントがバシュラルと重なる北方ルネサンスの画家パティニールの空間の構造を、模写することでその構造を確認していく方法が、作品を発展させるために連動した形となり、作品制作領域の研究として独自性をもった内容であると評価された。

審議の経緯

2022年2月21日、2号館4階の絵画組成室において、余夢婷の博士学位論文『絵画の物質的想像力と夢想』の公聴会を開催した。申請者が用意した資料がスクリーンに映され、論文の骨子が説明され、バシュラールの思考とパティニールの絵画空間、これまでの制作の内容と経緯、さらに会場に展示された模写を含めた作品についてプレゼンテーションを行った。その後質疑応答となり、会場からは、模写をした意味、パティニールを対象にした理由、インプリミトゥラの概念の確認、新作における俯瞰的視点の硬さ等についての質問がでた。コロナウィルス禍での制限もあったが、ズームでの参加も含め多くの傍聴者が参加した。

公聴会終了後、1号館217の小会議室へ移動し、審査委員5名により、申請者に二巡する形で質問がなされた。予備論文時点での作品は、論文の言葉に近づき過ぎている様に見えるが、新作はそれがないが、何が加わり、何が消えたのか。パティニールの空間と、北宋の三人の画家の空間の違いが、東アジアに住む作者にとって如何に意識されるのか。北宋の画家のもつ余白の形態をどう意識するのか。論文の展開が意識され過ぎないように、予定調和にならない作品の自立を考えてと、作品のなかで生きるであろう論文の研究の意味に対する指摘や質問が多くなされた。

申請者退室後、審査委員による審議を行った。夢を絵画にするという容易ではない研究のなかで、バシュラールとパティニールを選び取り、夢想と時間のエレメントを骨格に、作品を拵げていく装置を手にしたであろう研究が、作品制作研究領域においてのひとつの形であると評価され、全員一致で合格と判定した。



春風
2020年 油彩、カンバス 116.7 × 116.7cm



夏火
2020年 油彩、カンバス 116.7 × 116.7cm



秋土
2020年 油彩、カンバス 116.7 × 116.7cm



冬水
2020年 油彩、カンバス 116.7 × 116.7cm



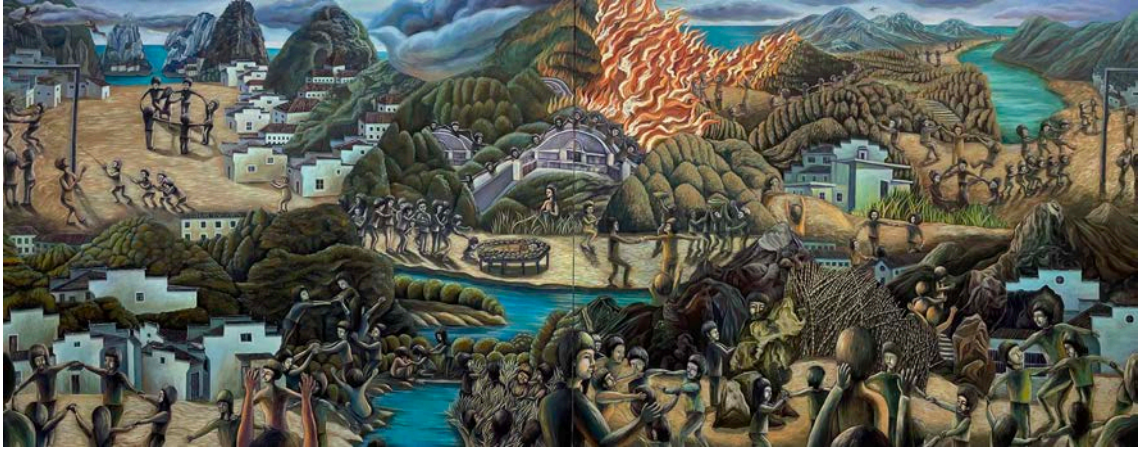
子供の夢想

2021年 油彩、キャンバス H1303 × W1620mm × 2



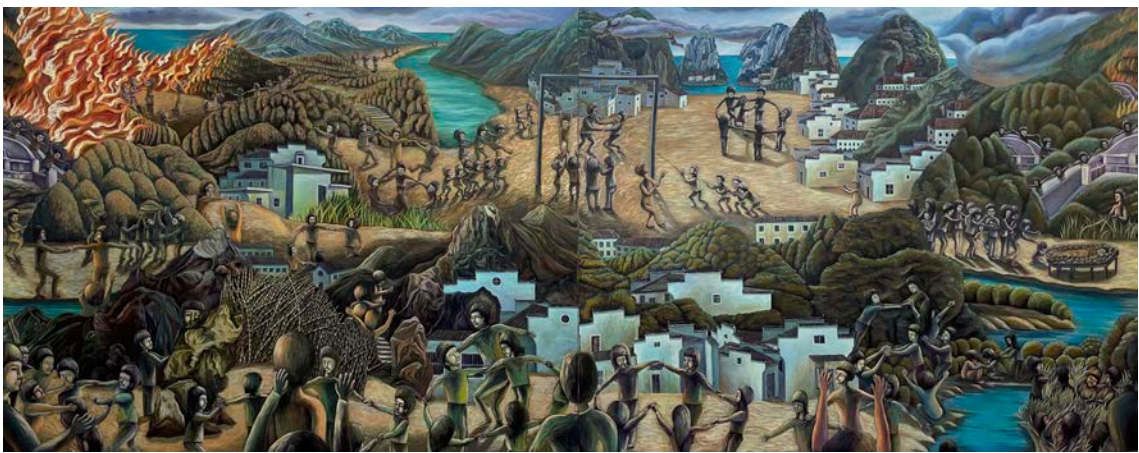
幼少期の思い出

2021年 油彩、キャンバス H1303 × W1620mm × 2



運命が至る場所 I

2021年 油彩、キャンパス H1303 × W1620mm × 2



運命が至る場所 II

2021年 油彩、キャンパス H1303 × W1620mm × 2



ヨアヒム・パティニール《ステュクス川を渡るカロン》
(1515年-1524年、油彩・板、64×103cm、ブラド美術館)の模写



ヨアヒム・パティニール《聖ヒエロニムスのいる風景》
(1524年、油彩・板、74×91cm、ブラド美術館)の模写